

# お薬のしおり

## 正しい坐薬の使い方

No.94 (H21.8)

東京医科大学病院 薬剤部

坐薬ざやくの使い方では、「座ざって飲んでみた」とか「お尻しりに入れて」という説明を「お汁おじゆに入れて」と聞き間違えたなど笑えない話が沢山あります。今回は坐薬の正しい使い方についてももう一度確認してみましょう。

坐薬とは肛門こうもん（膣ちつ専用の坐薬もあります）に使用する固形の外用薬です。直腸ちよくちよう、肛門など使用した部分に作用することを期待するもの（便秘治療薬、痔疾患治療薬など）と、使用した薬の有効成分が血流に入り全身に作用することを期待するもの（解熱鎮痛薬げねつちんつうやく、吐き気止め薬はきげ、抗けいれん薬など）があります。

一般的に坐薬は内服薬に比べて吸収が早く、効果がすぐに現れるという利点を持っています。解熱鎮痛薬の坐薬の場合は、入れてから 30 分以内に効果が現れ、その効果は 4～6 時間持続します。早く症状を改善したいときや、吐き気が強く内服薬を飲んでも薬を吐いてしまうときなどは坐薬がとても効果的です。しかし、肛門や膣に直接挿入するため、上手に入れられないこと、入れるとすぐに便意を催してしまうことなどの理由から坐薬が苦手な人は少なくありません。

坐薬を入れるときは、中腰ちゅうごしの状態ちゆうごしで坐薬の後部をティッシュペーパーなどでつまみ、先のとがった太い方から肛門の奥まで入れ、2～3 分じっとしてからゆっくりと立ち上がると自然に肛門部に収まります。中腰が出来ない場合は、横向きに寝た状態で足を曲げ、中腰と同様に坐薬を入れた後 2～3 分じっとしてからゆっくりと足を伸ばすとうまくいきます。乳幼児に



使用する場合は、おむつを替える要領で両足をあげて持ち、坐薬を入れてから5秒程度肛門を押さえ、2～3分してからゆっくりと足を伸ばすと上手く入れることができます。また、坐薬が外に出ないようにするため、挿入後20～30分は運動など激しい動きを避けるようにしましょう。

坐薬挿入後、<sup>いぶつかん</sup>異物感や<sup>べんい</sup>便意を感じても、坐薬が溶ければ治まるので心配ありません。便意は坐薬を入れることによって腸が刺激されるために起こりません。これを防ぐにはなるべく排便を済ませてから坐薬を入れるようにし、坐薬は冷たいままではなく使用する前に手で少し温めるといいでしょう。それでも坐薬が出てしまったときは、出た坐薬の状態によって対処法を変えます。

坐薬を入れた直後に出た場合

すぐに新しい坐薬を入れ直します。

入れてから少し時間が経って出た場合

坐薬の形が崩れていなければ新しい坐薬を入れ直します。

坐薬の形が崩れているときは薬がどのくらい吸収されたかわからないため、しばらく様子を見て必要であれば新しい坐薬を入れます。

ほとんど溶けている状態であれば入れなおす必要はなく、次に使用できる時間まで様子を見ます。

坐薬は内服薬と違って定期的に使用するのではなく、症状があるときだけ使用する薬がほとんどのため、症状に応じて使用を調節できます。

子どもには解熱鎮痛薬、制吐薬、抗けいれん薬などの坐薬がよく使われます。また、2種類の坐薬を組み合わせることも珍しくありません。しかし、坐薬を併用する場合、坐薬を入れるタイミングによってはそれぞれの坐薬の効き目が低下してしまうこともあります。2種類の坐薬を使用するときは、なるべくそれぞれの影響を少なくするために続けて使用するのではなく、1つ目の坐薬を入れてから30分～1時間程度の時間を空けて2つ目の坐薬を使用するといいいでしょう。

薬のことでわからないことがあるときは医師や薬剤師に相談してください。薬の特徴を正しく理解して上手に使っていくことで、つらい症状を早く取り除くことができます。